

正岡子規

創造の共同性

坪内稔典



シリーズ
民間日本学者
32

正岡子規

創造の共同性

坪内稔典

リポート

正岡子規（まさおか・しき）

——創造の共同性

つばうちとしのり
坪内稔典

1944年愛媛県生まれ。立命館大学卒業。
現在京都教育大学教授（国文学）。俳人、『船団』主宰。
評論集に
『子規随考』（沖積舎）
『弾む言葉、俳句からの発想』（くもん出版）
『俳句——口語と片言』（五柳書院）
句集に
『落花落日』（海風社）
『猫の木』（沖積舎）など。

1991年 8月30日 初版第1刷発行

著 者 坪内稔典

発行者 小川道明

株式会社 リプロポート

〒 171 東京都豊島区南池袋2-23-2
池袋パークサイドビル

電 話 東 京 03(3983)6191 編集直通(3983)1895

© T. Tsubouchi 1991 Printed in Japan

装幀／平野甲賀

編集担当／早山隆邦

印刷・誠和印刷 製本・大口製本印刷

ISBN 4-8457-0662-8 C 0023

正岡子規―創造の共同性―もくじ

第一章 月給四十円―子規の生涯 7

- 1 十年の生命 7 2 病牀六尺の日常 16 3 父上許したま
ひてよ 23 4 母―稲ノ一穂 31 5 妹―嫁せども去てら
れ 37 6 子供がや／＼親父ひよこ／＼ 45 7 月給四十
円 51

第二章 書く―一条の活路 59

- 1 絶筆の光景 59 2 手習いと素読 66 3 表現の始まり
71 4 漱石の批判 77 5 書く工夫 82 6 鬱さ晴らし
87 7 一条の活路 93

第三章 分類―子規の思考法 97

- 1 俳句ヲ分類ス 97 2 完結の期ある無し 100 3 俳句分類

の意義 104 4 生の実感と創造 110 5 分類という思考法

118 6 分類の楽しさ 124

第四章 写生―感受性の核 127

1 実際の有のまゝ 127 2 写生のはじまり 135 3 写生の素

地 141 4 不折の写生論 145 5 性向の発見 150 6 日常

の草花 155

第五章 議論―自他を開く 163

1 議論好き 163 2 シンは冷たい 166 3 左千夫との議論

172 4 文学としての和歌 179 5 議論の戦略 184 6 内外

共に敵にて候 188 7 「日本」は健全にして 194 8 実地の

議論 201

第六章 形式―定型的発想 207

1 定型的発想 207 2 写生文 213 3 週間日記と一日記事

詩	218
4 小さな表現	228
7 欠点が長所	246
5 鉛筆と手帳の力	234
6 極小の	

第七章 共同—小さな夢

1 子規の夢	253
4 些事の歌	266
2 会の楽しさ	257
5 そこが空っぽになる	274
3 小さな場	262

あとがき 281

年譜 289

人名索引

装幀 平野甲賀

正岡子規―創造の共同性―

第一章 月給四十円——子規の生涯

1 十年の生命

正岡子規は慶応三（一八六七）年九月十七日（太陽曆十月十四日）、現在の愛媛県松山市に生まれた。明治と改元されるほぼ一年前のことである。本名は常規^{つねのり}、幼名をはじめ処^{ところ}之助^{のすけ}と言^いい、のちに升^{のぼる}と改めた。近親者や友人は「へのぼさん」と呼んだ。

父は松山藩士（御馬廻加番）の正岡集太常尚で、子規の出生当時三十五歳。母は松山藩の儒者だった大原觀山の長女・八重。この母は二十三歳だった。明治三年には妹・律が生まれたが、同五年、父は四十歳で早世した。以後の子規は、母の生家である大原の人々の格別な被護のもとに、母と妹との言わば母子家庭において成長する。

子規の生涯は短かった。明治三十五（一九〇二）年九月十九日（太陽暦）、満年齢の三十五歳に約一ヶ月足らないで死去した。その短い生涯において、彼は俳句、短歌を近代の詩として再生させる一方、与謝蕪村や『万葉集』という古典を再発見した。また、写生文の実践を通して、今日の文章体のひとつの原型を作り出した。以上の俳句、短歌、写生文が、彼が後世に残した大きな文学上の仕事であつたが、そのほかに子規は、漢詩、新体詩、小説の創作を試みたし、「俳句分類」をはじめとする各種の編集にも力を注いだ。最晩年には、モノルヒで痛みを抑え、枕に頭をつけたままで草花などの写生画も描いた。

彼の文学的な活動は、自らが「病牀六尺」と呼んだ狭い場所で行われた。俳句だけはまだ比較的元気なうちにその再生の目途がついていたが、短歌や写生文は病床で取り組んだ仕事であつた。子規が、宿痼となる結核にとりつかれたことを自覚したのは明治二十二年五月の

活 動 期			修 学 期		
文 章 (写生文)	短 歌	俳 句	文 章 (雑文)	漢 詩	表現形式
明治31	明治31	明治25	明治11	明治11	年 代
『寒王集』 『墨汁一滴』 『病牀六尺』 『叙事文』など	『竹乃里歌』 『歌よみに与ふる書』など	『寒山落木』 『俳句稿』 『俳諧大要』 『俳人燕村』など	『自笑文章』 『無花果草紙』 『七草集』 『筆まかせ』など	『同親会詩鈔』 『諸先生刪正詩稿』など	作 品
山 会	歌 会 万葉集輪講	句 会 燕村句集輪講	言 志 会	書 同 画 親 会 会	グループ活動
日 ホトトギス 本	日 本	日 ホトトギス 本	回 覧 雑 誌	回 覧 雑 誌	主な媒体

ことだが、以来、彼は「今より十年の生命」(「啼血始末」明治二十二年)を自覚して生きはじめた。〈今より十年の生命〉とせめぎ合うように生きたところに、子規の生涯の第一の特色があったと言ってよい。〈病牀六尺〉という狭い場所にいながら、子規はその文学的な仕事のことごとくを、グループ活動として展開

した。子規の〈病牀六尺〉は言わば共同の創造の核であつた。ここに子規の生涯の第二の特色を指摘できる。ちなみに、子規の活動を図示すると前頁の図のようにならうか。

彼の活動の全体を、修学期と活動期に二分したが、明治十一年頃から始まる漢詩や文章の創作については次章でふれる。明治二十五年を修学期から活動期へ移つた年としたのは、この年、新聞「日本」に「かけはしの記」(五、六月)、「ぶつさい頼祭書屋俳話」(六、十月)を連載、文科大学を中退して日本新聞社に入社したからである。母と妹を東京に迎えて一家を構えた子規は、日本新聞社社員として後半生を過ごすことになるのだが、彼が〈俳魔に魅入られた〉ようすを書きとめた文章を引いておく。

此年(筆者注―明治二十四年)の暮には余は駒込に一軒の家を借りて只一人で住んで居た。極めて閑静な処で勉強には適して居る。しかも学課の勉強は出来ないで俳句と小説との勉強になつてしまふた。それで試験があると前二日位に準備にかゝるので其時は机の近辺にある俳書でも何でもとことと尽く片付けてしまふ。さうして机の上には試験に必要なノートばかり置いてある。そこへ静かに坐をしめて見ると平生乱雑の上にも乱雑を重ねて居た机辺が

清潔になつて居るで何となく心持が善い。心持が善くて浮き／＼すると思ふと何だか俳句がのこ／＼と浮んで来る。ノートを開いて一枚も読まぬ中に十七字が一句出来た。何に書かうもそこらには句帳も半紙も出してないからラムプの笠に書きつけた。又一句出来た。又た一句。余り面白さに試験なんどの事は打ち捨てゝしまふて、とう／＼ラムプの笠を書きふさげた。(略)

斯ういふ有様で、試験だから俳句をやめて準備に取りかゝらうと思ふと、俳句が頻りに浮んで来るので、試験があるといつても俳句が沢山に出来るといふ事になつた。これ程俳魔に魅入られたら最う助かりやうは無い。明治廿五年の学年試験には落第した。

〔墨汁一滴〕明治三十四年

この落第が大学中退の決意を固めさせるのだが、実はこの当時の子規は、一種背水の陣とも言ふべき状態にあった。子規は明治二十四年十二月の冬休み、常盤会寄宿舎(旧藩主が藩の子弟のために設けていた寄宿舎)を出て家を借りた。後見人の叔父・大原恒徳宛の手紙(明治二十四年十月十五日)では、(私も本箱が追々繁殖すれば殖民でもせねば舎内でハ余地無

御座故近々の内適當の地あらば下宿せんと心掛居候」と下宿したいという希望を述べているが、子規のこの希望は親戚の間で物議をかもした。家禄奉還金(千二百円)を銀行の株券などにかえ、その株券の売却益や利子で生活していた正岡家の経済は、当時、家を借りるなどというぜいたくを許さない状態になっていたのである。明治二十五年一月、いとこの佐伯政直が第三者の眼で作成した正岡家の家計案(子規宛手紙)によると、子規の大学卒業(二十六年の予定)までの経費を極力きりつめたとして、明治二十七年に残っている正岡家の資産は、銀行株三枚、住家一棟だという(子規が育った家と土地は明治二十二年に約三百円で売却されていた)。この家計案では、二枚の株券売却によって一年間の経費がまかなわれているが、要するに子規が大学を卒業する頃には、正岡家には経済的な余裕がほとんどなくなるのであった。親戚の人たちからこうした点を指摘された子規は、小説を書いて収入を得ようと考えた。大原恒徳に、〈初陣之事故功名の程ハ固より覚束なく候へども多少の金にならぬことも有之間敷ト奉存候〉(十二月二十五日)と書き送って家を借りることを決行した子規は、来客を謝絶して小説「月の都」を書き上げ、二十五年二月、幸田露伴を訪ねて批評を依頼した。だが、露伴の批評はかんばしくなかった。子規の河東碧梧桐宛の手紙によると、露伴は〈覇

氣強し」と評したというが、明治二十七年に『小日本』に掲載されたその「月の都」を見ると、テーマや筋立てが露伴の『風流伝』（明治二十二年）のかなりあからさまな模倣になっている。『風流伝』は、坪内逍遙の『当世書生気質』について子規が感動した小説であり、小説の尤も高尚なるものである、若し小説を書くならば風流伝の如く書かねばならぬ（「天王寺畔の蝸牛廬」明治三十五年）と考えていたものであった。

結局、子規は、小説を書いて金を得ることはできなかったが、小説「月の都」を書き、そして試験勉強をしようとしながら、〈俳魔に魅入られた〉自分を見出していった。明治二十四年の秋、日本新聞社社長の陸羯南くがくなんを訪問した子規は、大学をやめて俳句の研究に専念したいと語ったという（「子規言行録序」明治三十五年）が、その頃、子規は生涯の事業として続けることになる「俳句分類」にすでに着手していたと思われる。〈俳魔〉というかたちで、文学が子規から抜き難くなろうとしていた。のちに、自分のなすべきこととして文学を選んだ理由を以下のように述べたが、余命十年の自覚が、一種の生き急ぎの姿勢をとらせ、好きな文学へと子規を引きこんだのである。

政治家とならんか、文学者とならんか、我は文学者を択ばん。政治家の技能は其局に当り其地位を得るに非ざれば見れず。其局に当り其地位を得るは一半は材能により一半は年齒による。縦令材能の衆に超ゆるあるも年齒の少きは遂に奈何ともするなきなり。(略)一般の例に拠るに少くも四十歳を越えざれば天下を動かす能はず。病軀蠢々命、旦夕を測られざる者豈手を拱して四十歳を待たんや。独り文学はしからず。四十歳を待たず、三十歳を待たず。二十歳にして不朽の傑作を得る者古来の大家往々にして然り。一月世に在れば一月の傑作あり、一年世にあれば一年の著作あり。天下の人、其著作の真価を認めずとも百代の後必ず之を知る。文学は材に在り、年に在らず。文学の人意を強うする者実にこれに在り。択んで文学に居る、しかも才短識浅、年三十を過ぎて未だ一字の伝ふべき者を得ず。文学に於ける亦為す無きなり。只文学の世俗と競はず年齒と関らず不羈自在にして毫も他の束縛を受けざる処に於いて独り自ら慰むるのみ。

〔病牀譚語〕明治三十二年

子規は自筆の墓碑銘を残した。明治三十一(一八九八)年七月、友人の河東可全(碧梧桐の兄)宛の手紙に同封したもので、ヘコレヨリ上一字増シテモ余計ヂヤ」と手紙には書き添え